

聞く・書く・伝える… 記者が伝授

# ことばの授業

ガイドブック



楽しみながら  
ホンモノ体験

15分でわかる

DVD

付き



読売新聞東京本社  
NPO 法人 企業教育研究会

# メモ帳を手にしあ取材！ 伝える面白さ 記者と体験

## 授業のテーマは「新聞記者になろう」

取材を通じて事実をつかみ、わかりやすい文章で読み手に伝える。こうした記者の基本を、3種類各2時間のプログラムにまとめました。メモ帳とペンを持てば、子どもたちは、もう新聞記者です。

## 記者と大学生がコンビで授業 毎年、全国約60校で開いています

社会部、国際部、地方部などで多くの経験を積んだ教育支援部記者が、教職を目指す大学生とコンビを組んで授業をします。2005年にスタートし、毎年、全国約60校で実施。国語、社会、総合学習など、さまざまな学習に活用できます。

## 実施は無料です

読売新聞社の社会貢献事業ですので、費用はかかりません。お気軽にご相談ください。

### 【目次】

はじめに（千葉大・藤川教授）	3	先生や児童・生徒の感想	8
3つの基本プログラム	4	主な実施校	10
アレンジプログラム	6	お申し込み・お問い合わせ	11
学校での活用例	7		

# コミュニケーション能力を 今から身につけてほしい

今、会社で報告書をうまく書けない、初対面の人ときちんと話せないという人がいます。若い人たちが社会や異なる世代との接点を持ちにくく、誰かのために何かを伝えることを学べていないためです。

子どもたちが、実質的なコミュニケーションを学ぶには、どうすればいいか。注目したのが、事実を端的に伝える新聞記者の技術です。記事を書く前に、まず資料を集め、その上でわからないことをわかる人に聞く。これは記者に限らず、情報を発信する時、誰もが基本として身につけておくべきことです。意見を言う時も、前提となるのは事実です。

記者の仕事からコミュニケーションに必要な要素を抽出したのが「インタビューをしよう」「記事を書こう」「見出しを見つけよう」という3つの基本プログラムです。

子どもたちは教室で、新聞記者やゲストの大人たちと会い、突っ込んで話を聞くことを体験します。記者が先生に、打ち合わせなしでインタビューする場面では、大人の本気の姿を見ることがもできます。

授業では、私ども企業教育研究会の、教育を学ぶ大学生が、記者と一緒にチームティーチングをします。将来、教壇に立ちたいという意欲を持ち、成長しつつある学生たちですので、きっと先生方とよい関係を築けるはずです。

それぞれのプログラムはわずか2時間ですが、子どもたちが社会とつながるきっかけ作りができればと考えています。(談)

千葉大教授  
藤川大祐



## 藤川大祐

千葉大学教育学部教授（教育方法学、授業実践開発）、NPO法人企業教育研究会理事長。メディアリテラシー、ディベート、キャリア教育、企業やアーティストとの連携など、さまざまな分野の新しい授業作りに取り組んでいる。著書に「学校・家庭でできるメディアリテラシー教育」（金子書房）ほか多数。



# 子どもたちの言語能力アップ 3つの基本プログラム



「あらかじめ用意した質問しかできない」「せっかくだいい話を聞いてきたのに、上手にまとめられない」。社会科見学や体験学習などで、先生方からこんな声を聞きます。

「ことばの授業」では、読売新聞の記者が、面白い話を聞きだすコツや、わかりやすい文章にして読み手に伝える方法など、プロならではの技を児童・生徒の前で披露します。子どもたちは、これをお手本にして楽しく取材や記事作りにチャレンジします。

ことばを使って聞き、書き、伝える。子どもたちが生きていく上で大切な、言語能力に焦点を当てた、3つの基本プログラムを用意しています。

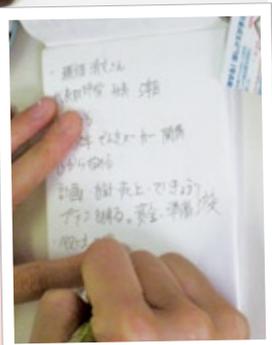


## インタビューをしよう



(上) 地域から招いたゲストにインタビューする生徒たち

(右) メモにもコツが。必要なことをうまく取れているかな？



### 知りたいことを「つっこむ」

人から話を聞く時、最も大切なことは「知りたい」「教えてください」という気持ちです。まずはお手本として記者が担任の先生方にインタビュー。丁寧なあいさつや、先生からの答えに追加質問でさらに深くつっこんでいく様子を見て、子どもたちは人から話を聞きだす時の姿勢を学びます。

そして、いよいよ子ども記者がグループインタビューに挑戦。「何を聞けばいいの？」と戸惑っている子も、記者のアドバイスを受けて、徐々に鋭い質問ができるように。最後に取材した「特ダネ」を模造紙にまとめ、班ごとに発表します。

### 働くことの大切さ知る

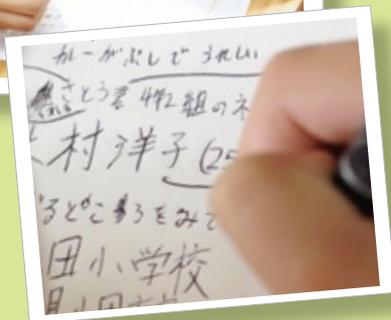
地域のつながりが薄れている現在、子どもたちが知っている大人は、学校の先生と親くらいではないでしょうか。授業では、インタビューの相手として地元の方たちをゲストに招きます。商店主、工場で働く人、警察官、銀行員、主婦、民生委員、ボランティア……。さまざまな「働く大人」に取材することで、子どもたちは、地域社会を見直すと共に、働くことや生きることの大切さを学び、将来を考えるきっかけにもなります。

## 記事を書こう



(上) メモを見ながら、熱心に記事を執筆

(右) 架空の事件ビデオを見ながらメモを取る



### 背景に何がある？

「見たことだけで書かない」。新聞記者が先輩から学ぶ心構えの1つです。記事を書く時は、必ず関係者から取材をし、表面から見えない事実を探り当てる必要があります。

授業で記者は、架空の事件のビデオを使い、映像からだけではわからない背景を取材で掘り起こして、パソコンで記事作りを実演します。完成まで数分。「もうできちゃった!」。子どもたちは、そのスピードに驚くはずです。ポイントを学んだら、今度は子ども記者の出番です。別のビデオ教材を使って取材開始。最後に書き上げた記事を発表します。

### 書くことへの抵抗感をなくそう

子どもたちが作文を書く時、何から書けばいいのか、どうすれば読み手に伝わる文章になるのか、わからない場合があります。新聞記事は、読者にニュースのポイントが的確に伝わるよう、一定のスタイルを持っています。

授業では、新聞記事が持つ「伝わる文章のスタイル」を使い、書くことへの抵抗感をなくすよう目指します。「作文が苦手な子が、しっかり書けた」。先生方から、こんなうれしい感想をいただいています。

## 見出しをつけよう



(上) 見出しが空欄になった記事を読んで、見出しを考える

(右) 自分がつけた見出しを発表



### どこに着眼？ それぞれに個性が

新聞の見出しは「記事を読まなくても、大まかな内容がわかる」「大きさとニュースの重要性を示す」などの役割があります。読み手に伝わる見出しをつけるには、情報を正確に読み取り、何がポイントかを考える必要があります。

授業ではクイズで、見出しをつけるコツを楽しく学びます。次に、見出しを隠した記事を読み、見出しをつけることにチャレンジ。最後に作品を発表します。同じ記事でも一人ひとりの着眼点が違うため、子どもたちの個性が出ます。

### 読み手に伝わる文章の仕上げに

子どもたちの作文や学級新聞の題名は、「夏休みの思い出」「運動会」など、単なるタイトルになってしまっている場合が多いようです。文章の中で「ここを一番読んでほしい」というところを、短い言葉で的確に表現すれば、もっと生き生きとした作品になるはずですよ。

新聞社には記事に見出しをつける専門部署があり、その担当者は「見出し1つで、読者が記事を読んでもらえるかどうかが決まる」と言います。読み手に伝わる文章の仕上げに、見出しの工夫もしてみましょう。

# アレンジプログラム 2011年度の実践事例から

学校のご要望に応じ、3つのプログラムをベースにした特別授業もできます。ご相談ください。

## 茨城県つくば市・県立並木高校 (3年)

### 1枚の写真から「何が起きたか」を探る

「ニュース性のある文章に取り組み、事実を正確に書く力を身につけさせたい」とのご要望を受け、高校生向けの「記事」の授業を考えました。題材にしたのは、東日本大震災の津波で勉強道具を失った岩手県の三陸地域の小学生に、盛岡市の子どもたちがランドセル800個を贈ったという読売新聞の記事。ランドセルを渡している写真だけ生徒に配り、何が起きたかを「目撃者役」の企業教育研究会の学生スタッフに取材して記事にまとめてもらいました。

「読み手に一番伝えたいことを考えて書こう」という記者のアドバイスに、生徒から「小論文対策にもなりそう」と感想が寄せられました。



▲写真をもとに、学生スタッフ（左）に質問する生徒

## 東京都杉並区・都立中央ろう学校 (中3)

### 先生の手話通訳+文字情報つき授業

特別支援学校で初の授業。「将来の進学に向け、新聞に親しむきっかけを作りたい」とご要望があり、「記事」の授業を実施しました。

多少の音は聞き取れる生徒も、ほとんど聞こえない生徒もいます。そこで、事前に先生と打ち合わせを重ね、①記者と学生スタッフそれぞれの説明を、先生が手話で同時通訳する②授業の手順を学生スタッフが文字情報に起こし、テレビモニターに映して説明する③生徒が読唇できるよう、説明を簡潔にし、丁寧に発音する——など、一人ひとりが授業内容を理解できるようにしました。



▲記者と学生スタッフの説明を、手話通訳する先生（左）

最後に、新聞に関して記者に質問をする時間も設け、生徒から「自分もこんなに記事が書けるなんて」「新聞をもっと読もうと思った」などの感想をもらいました。

## 茨城県古河市・わせがく高等学校 古河学習センター（通信制・単位制 高1~3）

### 「見出し」を手がかりに新聞に親しむ

「新聞は難しいという先入観をなくしたい」とのご要望から、「見出し」に注目して記事を読む方法を授業の前半で説明しました。

ニュース記事は、最も重要なポイントをリード文や第一段落に書くことが原則で、見出しもそこから作ります。このため、見出しや記事の冒頭だけ読めば、全体の内容がわかる仕掛けになっています。生徒はこうした説明を受け、見出しを手がかりに、新聞から気になる記事を探して発表。後半には、「なでしこ五輪切符」の記事を読んで、一人ひとりが見出しを作りました。

## 愛知県あま市立宝小学校 (6年)

### 一人ひとりの個性ある記事が完成

先生から「子どもたちは文章を書くのが苦手」と相談を受け、インタビューの内容を児童一人ひとりが記事にまとめることにしました。

①その人が今、何をしているか②なぜそれをするようになったか③今後、どうしたいか——という「現在・過去・未来」の3要素を書くことが、インタビュー記事の基本。この説明を受け、子どもたちはゲストへのインタビューの記事にまとめました。同じ人を取材しても、一人ひとりで「面白い」と感じたポイントが異なり、個性のある記事が完成しました。

# 調べ学習、校外学習、社会科見学…… 学校での活用例

カリキュラムに「ことばの授業」を取り入れ、効果的に活用している学校を紹介します。

## 理科の調べ学習と発表に活用

東京都新宿区・区立津久戸小学校（4年）

●2011年7月「記事を書こう」、9月「見出しをつけよう」

津久戸小が2011年度、理科の学習で重点に置いたのは、「かくこと」。環境をテーマにした調べ学習の準備で、「記事」「見出し」の授業を行いました。

子どもたちは、2つの授業で「大事なことから書く」「要点をつかみ、短い言葉で表現する」ことなどを学習した後、自然エネルギー、水、地球温暖化などさまざまな課題を調べました。画用紙にまとめ、スピーチ原稿も作って発表。4年1組担任の中嶋玉恵先生は「授業で学んだことが、わかりやすいまとめを書く力につながった」と話しています。

また、作文が苦手な男の子が、記者にほめられたことをきっかけに、区の作文コンクールに応募するようになったとか。中嶋先生は「『ことばの授業』で子どもたちのコミュニケーション力が伸びた。そんな手ごたえを感じる」と話しています。



▲緑のカーテンや、雨水タンクなど、環境をテーマに子どもたちが調べたことをまとめたポスター

## 総合学習に必要な、取材力などを身につける

千葉市・千葉県立千葉中学校（1年）

●2011年6月「インタビューをしよう」

学習を通じて社会で役立つ力を身につけるため、全生徒が半期ごとに学年を横断するゼミに所属し、調べ学習を行う千葉中。新1年生は毎年、「インタビュー」の授業を受けて取材や発表の方法を学んだ後、ゼミ学習を本格化させます。

米軍普天間飛行場の移設問題を取り上げた生徒は、外務省や在日アメリカ大使館、沖縄県庁などに、緊張しながら電話取材。食い下がってもよい回答が得られないところがあった一方、丁寧な答えも引き出すことができ、有意義な発表ができたといいます。原子力をテーマにした生徒は、佐賀県玄海町や福井県にある原子力広報施設にメールで質問したり、街頭調査を行ったりしました。

学習の成果は、教育関係者などを招いて10月に開かれた「千葉中アカデミア」で発表されました。学習指導部長の大窪晋先生は「事前に質問を相談し、実際にインタビューをする力や、質問に対する相手の答えを要約する力などが培われました」と話しています。



▲米軍普天間飛行場の移設問題を取り上げた班。外務省などにインタビューした成果を発表した



▲原子力をテーマに発表した班。多くの生徒、保護者が聞き入っていた

# 先生や児童・生徒の感想 ——2011年度の実施校から

実施校の先生方や児童・生徒たちから、たくさんの感想をいただいています。皆様のご意見をもとに、さらに良い授業にしていきます。



## メモを取る様子に子どもたちも驚き

東京都三宅村立三宅小 宮沢大陸教諭（5年生担任）



特に印象に残ったのは、記者がメモを取る様子です。片手に収まる程度のメモ帳に次々と書き込む姿に、子どもたちはびっくりしていました。国語を始めとする各教科で児童が発表する際、内容をメモに取り、後で振り返ることなどに活用できると思いました。長野県での体験学習で、農家の方へのインタビューや地元の小学校との交流を予定しており、その参考にもなりました。三宅島を始め、島の学校では、授業で島外の人と交流する機会がほとんどありません。私のクラスも12人だけです。わざわざ足を運んでプロの目線で子どもたちにお話しただけで感謝しています。



## 児童・生徒の感想

- もらったメモ帳で家族にもインタビューします。（小4、インタビュー）
- ビデオを見てメモを書いているときは本当に記者になっているように感じました。（小4、見出し）
- 学級新聞を作る時間に、記事の見出しがうまく書けました。（小4、見出し）
- 新聞記者の人がメモをとって記事にするのがとても速くてすごいな—と思った。（小5、記事）
- 大切なことから書く、という書き方で記事を書いて、いつもとは一味違うことを書けました。（小5、記事）
- 何が足りないのか、疑問を考えながらインタビューするのが難しかった。（中3、記事）
- 自分だけが分かる見出しをつけるのでは、ダメだと思った。（高1、見出し）
- 「文章が下手でも、自分の伝えたいことがあれば大丈夫」という記者の言葉に励まされました。（高3、記事）

## 話を聞く姿勢が身についた

新潟県小千谷市立岩沢小 若月安明教諭（3・4年生担任）

地元を流れる信濃川に親しみ、「川との共生」を考えることを年間テーマにしています。川の恵みを生かした昔の人の暮らし方を地域のお年寄りから聞き取るため、インタビューの授業を依頼しました。子どもたちは、戦争中の暮らしや地域の昔の様子など、お年寄りの話を食い入るように聞き、熱心にメモを取っていました。新聞記者によるインタビューの実演を見て、人から話を聞く姿勢が身についたと感じています。その後の川の生き物調査などでも、専門家や地域の人たちに、自分が聞きたいことをしっかり伝え、学んだことを堂々と発表するなど、「ことばの授業」で身につけたことを生かして、学習を進めることができました。



## 国語の単元にもぴったり

群馬県大泉町立東小 五味田晃弘教諭（5年生担任）

新しい学習指導要領に「新聞の活用」が盛り込まれたのを受け、「記事」の授業を申し込みました。取材を体験することで、的確に聞き取ることの大切さを実感でき、記事にする際のポイントもよくわかりました。とても内容の詰まった有意義な授業で、国語の「新聞を読もう」と「インタビューをして大切なことをメモしよう」という単元にぴったりです。授業で使ったビデオ映像もしっかり作られていて、子どもたちは興味を持って授業に取り組んでいました。今後は、実際に新聞ができるまでを、工場見学などを通じて児童に体験させたいです。



## 大人とじっくりふれあう機会

京都府長岡京市教育委員会青少年・スポーツ課  
中島早苗さん（青少年育成担当）

市内の小学校で放課後、地域の方々と子どもたちがふれあう「放課後子ども教室」を開いており、1～6年生の計約40人に「インタビュー」の授業を体験してもらいました。地域の方と面識はあっても、どんな仕事をしているかを聞く機会は初めてで、大人と子どもがじっくりふれあえたと感じています。1、2年生には少し難しいかなと思いましたが、上級生がインタビューの順番を決めるなどよく面倒をみてくれました。子どもたちは「聞くのが楽しすぎた!!」（1年生）など、うれしい感想を寄せてくれました。



# 2009～2011年度の 「ことばの授業」主な実施校

(学校名と地名は実施当時のもの)

全国の小・中・高校を対象に  
年間約60校で実施しています

## 中国・四国

広島県廿日市市・吉和小  
広島県廿日市市・吉和中  
岡山市・東岡山工業高  
松山市・愛媛医療福祉専門学校

## 東海・甲信越

愛知県あま市・宝小  
新潟県小千谷市・岩沢小  
山梨県北杜市・小淵沢小  
長野県上田市・菅平中  
静岡県沼津市・浮島中  
山梨県大月市・都留高

## 北海道・東北

福島県いわき市・小名浜高  
福島県石川町・県立石川高

## 関東

群馬県太田市・中央小  
栃木県鹿沼市・久我小  
埼玉県戸田市・喜沢中  
東京都世田谷区・目黒星美学園中  
神奈川県厚木市・厚木高  
千葉県柏市・柏の葉高

## 関西

大阪府堺市・熊野小  
和歌山県印南町・印南中  
奈良県斑鳩町・斑鳩中  
神戸市・東灘高  
奈良市・高円高  
京都府長岡京市教育委員会

## 九州・沖縄

鹿児島県さつま町・柊野小  
宮崎県高鍋町・高鍋西中  
鹿児島県鹿屋市・鹿屋女子高  
熊本県大津町・大津高



# 実施校を募集しています お気軽にお問い合わせください

授業の時期は、可能な限り学校のご希望に合わせてます  
全国どこへでもうかがいます  
費用はかかりません  
授業内容のアレンジなど、ご相談に応じます

## ステップ 1

企業教育研究会の「ことばの授業」ホームページ  
(<http://ace-npo.org/info/kotoba/>) から応募用紙をダウンロードしてください  
記入して企業教育研究会へ、FAX (050-3588-0125) か  
メール (kotoba@ace-npo.org) で、お送りください

## ステップ 2

企業教育研究会から、ご連絡します  
日程やプログラムの内容  
クラスごとの実施か、複数クラスの合同授業か  
実物投影機など必要な機材  
……など

## ステップ 3

授業の1週間前をメドに、書面で最終確認します  
授業で使うメモ帳を宅配便であらかじめお送りするので、保管をお願いします

## お問い合わせ

読売新聞教育支援部

☎ 03-6739-6984

NPO法人企業教育研究会

☎ 043-308-7229

メール [kotoba@ace-npo.org](mailto:kotoba@ace-npo.org)

ことばの授業

検索

<http://ace-npo.org/info/kotoba/>

### 読売新聞教育支援部

新聞社でなければできない教育貢献を進めるため、2004年、東京本社の社長直属部署として発足しました。

編集局で取材経験を積んだベテラン・中堅記者や、広告局・総務局出身の社員などがメンバーです。「ことばの授業」以外にも、学校向け教材「読売ワークシート通信」の配信、読売新聞朝刊の「ポケモンといっしょにおぼえよう！」シリーズなどを手がけています。

### NPO法人企業教育研究会 (ACE)

誰もが教育に貢献する社会を目指し、藤川大祐・千葉大学教授を中心に、企業やNPOとの協力で新しい授業や教材の開発をしています。

子どもたちには、社会とのふれあいを通じた学びを、企業に対しては、学校のニーズにあった教育プログラム開発を、それぞれ提案しています。

企業と学校の架け橋となるため、さまざまな企業と連携しています。



2011年11月発行